

青森市の埋蔵文化財

横内城遺跡発掘調査報告書

1986

青森市教育委員会

序

青森市では昭和61年度、国・県の補助を受け、構内城跡の緊急発掘調査を実施いたしました。

寺院建設に伴う調査なので、城跡の1/100にも満たないものでありますが、貴重な資料が散逸することなく蓄積され、構内城の解明の一助にならんことを願い調査したものであります。青森市には現在18の中世城館があり、青森県立郷土館で実施した尻八館が全国的に有名であります。他は全くの未調査であります。また、文献も全くないと云ってよく、謎の中世であり、その解明が待たれるところであります。

此の度、関係各位のご努力による報告書が作成され、学術文化の面にいささかでも寄与できるならば幸いに存じます。

昭和62年3月

青森市教育委員会
教育長 安部 健五

例 言

1. 本報告書は、昭和61年度に実施した青森県青森市に所在する横内城跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、青森市教育委員会が主体者となって昭和61年5月16日から同年7月17日での期間で実施したものである。
3. 本報告書は、塩谷隆正が編集・執筆したが、佐藤文一、小笠原幸範氏に調査及び整理に於いて度々協議し、図版及び写真は両氏が分担したものである。
4. 本報告書に収録した図版の縮尺は、それぞれの大きさによって数字及び単位を記載した。ただし写真図版に関しては縮尺不同である。
5. 出土遺物は、すべて青森市教育委員会が保管し、地域社会の学術・文化の資料として活用するものである。

目 次

序

例 言

調査と概要

1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の位置	1
(1) はじめに	1
(2) 遺跡の位置	2
(3) 調査要項	2
3 遺跡の概要	3
4 周辺の遺跡	4

発掘調査

1 調査方法	5
2 調査の経過	5
3 基本層序	7

検出遺構

1 竪穴遺構	9
2 溝状遺構	9
3 土 坑	9

出土遺物

1 土 器	13
2 陶 器	13
3 銭 貨	13

ま と め



第1図 遺跡の位置

調査と概要

1. 調査に至る経緯

朝日山常福院が改築するという話は、昭和60年9月29日に、青森市教育委員会社会教育課が文化財保護啓蒙活動のために実施している「史跡文化財めぐり」の際、構内城を見学した時に住職から聞いていたが、規模や工事等について詳しい説明がなかったし、また工事を施工するとなれば、当然文化財担当課である社会教育課へ相談に来るものと思っていたので、具体的な計画が出来上がっていないものと想定していた。

設計者が、昭和61年1月7日に、設計書(案)を持って青森市役所建築指導課を訪れたところ、当該地は周知の遺跡であるので、教育委員会の社会教育課へ行って相談するようにと云われて、当課へ設計を委託されている弘前市の前田設計事務所が相談に来た。

設計案では、現在の常福院の裏側(東側畑地)約200cm²を凹凸があるので整地をし、堀をその土砂で埋め立てるというものであったので、改めて事の重大さが判明したものである。

また、常福院建設委員会を設け、費用は全て檀家の新位牌檀の募集により集めたもので、建設資金よりみていないし、今更、再募集もできないという当課にとっては最悪の事態となった。

そこで、当課では最速、関係機関や文化財審議会委員とも協議し、どのようにしたら、事業者及び文化財保護行政財側も納得をえられるかを検討した。

結果は、事業者は、出来るだけ現状を変更しないため、まず整地をしないこと。二つには堀を埋めないで現状を保つことを条件とし、基礎を打つ部分は発掘調査をするということになった。

そこで当課では発掘調査費の捻出についても検討したが、新年度予算はすでに間に合わないし、県の文化財保護行政担当の文化課と連絡をとりながら、61年度に発掘計画を予定していた八甲田霊園の調査を変更して貰い急拠その手続きをしたものである。文化財の保護は、一般市民及び、土地の所有者、その他の権利者が相互に理解しあって、その協力のもとに進めるのでなければ万全の成果を上げられないものと判断し、関係者に説明し理解を求めたところ、事業者や檀家等も納得し、当方から出された条件を全て予解を得たので調査を実施したものである。

2. 遺跡の位置

(1) はじめに

青森市は北緯 40° 49'、東経 140° 45' にあり、本州の最北の人口約 30 万の都市で面積は 693.43km² である。

市の南部から東部にかけて八甲田山系、西部を梵珠山系に囲まれており、地形上山地が多く、総面積の83%は森林が占め、耕地は9%弱に過ぎず、耕地の8割は水田であって、全国はもとより、青森県平均と比較しても非常に涼しい。

気象条件は、日本海気象と大平洋気象と双方の影響を受けるために冬季には寒冷多雪で、夏季には偏東風（やませ）があり、冷害が生じやすい。

(2) 遺跡の位置（第1図）

青森市街地から約8km南に存し、北八甲田連峰に水源を有する東側の構内川と西側の合子沢川に挟まれた雲谷平のすそ野北端郡で標高100m～130mの洪積世台地上に位置する。構内本村の南東部にあり、現在、朝日山労福院、北側には稻荷神社がある。

(3) 調査要項

1) 調査目的

開発により遺跡の一部が砂破壊される事前に発掘調査をし、記録保存を図るとともに地域社会の学術・文化の活用に資する。

2) 遺跡の名称及び所在地

構内城跡 青森市大字構内字亀井 146 番地

3) 調査面積

280 m²

4) 調査期間

昭和61年5月16日～同年7月17日

5) 調査主体者

青森市教育委員会

6) 調査員

青森市教育委員会社会教育課主幹兼文化係長 塩谷 隆正

元埋蔵文化財調査センター勤務 佐藤 文一

3. 遺跡の概要

本遺跡名は、青森県埋蔵文化財色蔵地調査カードに01174番で城館、横内城（鏡城、堤城）となっていることによる。「青森県の中世城館」（青森県教育委員会、昭和58年3月31日発行）

『雲谷から青森平野に向ってなだらかに傾斜する丘陵の末端近くに構内川左岸に位置する。この城は、かつて円形をしていたとされ、鏡城とも称されたという。現在明瞭なのは本丸部分で、東西80m、南北160mの規模である。東は構内川に面する崖となっており、堀は北、西、南にある。規模は、北と南では幅10m～15m、深さ7～8mあり、西は幅8m、深さ2mと浅い。北側にさらに幅6～8m、深さ5mの堀がみられる。郭内の北側に稲荷神社、南側に真言宗智山派常福院がある。他は畑地となっている。「構内村郷土誌」では、構内城築城は明応7年（1498）という。「津軽一統志」によれば堤弾の時、大浦為信の外ヶ浜攻略で油川城を捨てたという。堤氏の後、城番が置かれたといわれる。』カードもこれに基づいている。

しかし、現状が明瞭なのは本丸部分であるとされているが、第2図にある現常福院が建立されている処を本丸と称しているらしいが、はたしてそうなのか。二ノ丸、三ノ丸があったらしいことは、昭和13年に、小反叔雄氏が表わした「津軽封内城趾考」の構内村旧館とする絵図からは、東西に内堀りがあり、常福院が西側の一部に寄ってあり、単郭ではなかったことがわかる。

また、沼館愛三著「津軽諸城の研究」にも堤城址の略図がのっており、構内川と合子沢川に狭まれ、比高8mの台地上に位置し西側の合子沢川のホリ、土居が明らかでないが、東西は167mで、現在の十和田北線が中心で集落を含んで成立しているように受けとれる。従って、全域を調査してからでないと、構内城跡の範囲を定めることは出来ないし、過去の文献等も、もっと資料価値を吟味してからでないと、批判もできないようであるので、資料の蓄積をまって検討していくこととしたい。また、中世の城館と近世の城との構造上の用語の使用も混乱があるようで、気になるところである。

表1 周辺の遺跡一覧表(第1図)

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
1	戸山	戸山字赤坂	散布地	縄文(前・中)	「青森市の原始時代研究録1」北林八洲晴
2	赤坂(1)(2)	戸山字赤坂	散布地	縄文(中)古代	昭和42年発見
3	蛭沢	駒込字蛭沢	集落	縄文(早・中・後・晩)弥生・古代	「蛭沢遺跡」青森市蛭沢遺跡調査団
4	駒込館	駒込字蛭沢	城館	中世	「青森市の原始時代研究録1」北林八洲晴
5	月見野	駒込字蛭沢	散布地	縄文(後)古代	「燃紋」10号 葛西励
6	沢山(1)	沢山字平野	散布地	縄文(晩)	「沢山 号遺跡調査速報」葛西励
7	沢山(2)	沢山字月見	散布地	古代	「沢山 号遺跡調査報告」藤田亮一
8	沢山(3)	沢山字平野	散布地	古代	
9	月見野霊園	駒込字月見野	散布地	古代	
10	玉清水	駒込字月見野	散布地	縄文(晩)	
11	土清水	駒込字月見野	散布地	縄文(後)	
12	土清水	駒込字月見野	集落	縄文(前)	昭和45、市教委調査
13	玉清水	駒込字月見野	集落		
14	阿部野	幸畑字阿部野	集落	縄文(早・後)古代	昭和49、市教委調査
15	田茂木野	田茂木野字阿部野	散布地	縄文(中・後・晩)	「田茂木野遺跡調査報告書」塩谷・山岸
16	梨ノ木	駒込字深沢	散布地	縄文(晩)	
17	梨ノ木平	駒込字深沢	散布地	縄文(中)	
18	四ッ市	四ッ石字里見	散布地	縄文(後)	「四ッ谷遺跡調査概報」小町・井上
19	野尻館	野尻字野田	城館	中世	「青森県の中世城館」
20	構内(1)(2)	合子沢字山崎	散布地	縄文(前)	
21	新町野	新町野字菅谷	散布地	縄文(中)	



参考図

発掘調査

1. 調査方法

小反叔雄著「津軽封内城趾考」昭和13年によれば、「構内村旧館 提名亀井 堤弾正居之」の附図(参考図)があり、丁度発掘調査をしようとする個所が「三十八間、此处一段高シ」とある。他は方位、配置、面積で、この箇所だけがただし書きに受けとめられ、津軽一統誌に外ヶ浜構内城番十人衆を置いたとあることから、気になっていたので、構内城に関する古絵図及び地籍図等を探したが、見出せない。また古老等に聞いても、現常福院の池になっている処も含めて、もっと深い掘りになっていて、子供の頃水泳ぎをしたことがある等はつきとめたが、ここは昔から、一段高かったというに過ぎない。

しかし杭打ちの段階で、ここは盛土で、城館の使命が終わった後に埋められていることは、基本層序のところでも説明するが、明らかとなり、それも城番が置かれた後のようである。ともあれ、調査区域は、城跡に含まれ、中心と思われるところからは離れたところに位置するので、南北にBグリット、東西にA・Cグリット、つまり、F字形のグリットを入れ、遺構確認次第、順次拡張することにし、Bグリットは、南から北に向って1、2 とし、A・Bグリットは西から東に向って1、2 とした。

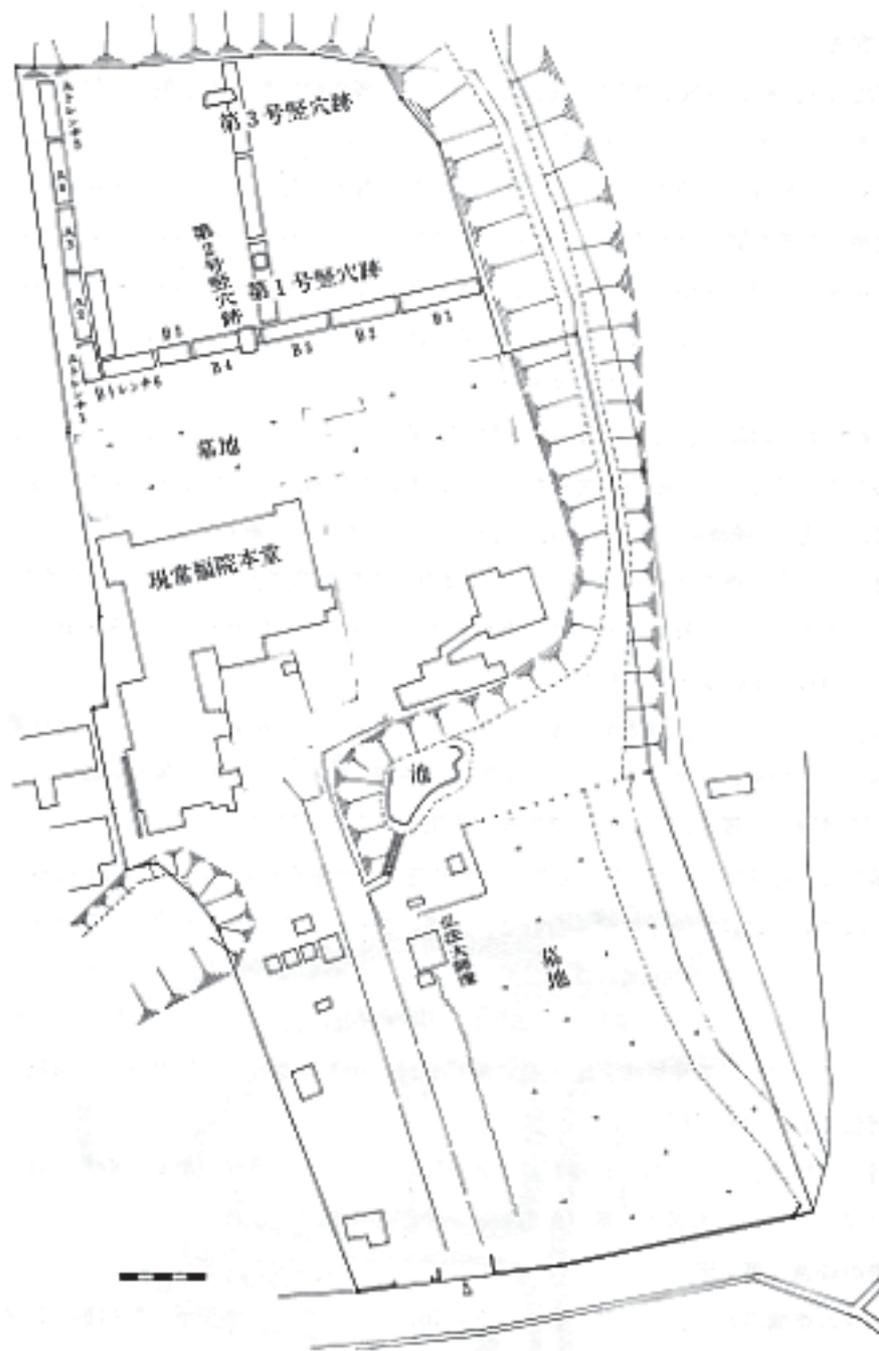
層序は、Bグリットは、西壁を、A・Cグリットは北壁を記録することにし、層序番号にはローマ数字を、間層にはアルファベットを用い、色調、成分、包含遺物等を記録することとした。また、遺構内の覆土については算用数字を用いた。

遺構番号は、発見順に付し、平面実測には簡易遣り方測量を用い、縮尺は1/10を原則とした。遺構は、確認面において周辺状況も合わせ、遺構の掘り込み面と基本層序との関係を留意し、平面図を作成した。また、上層の推積状態を把握するための4分法を原則としたが、状況に応じて分法も合わせて用いた。遺物については、遺構ごとに独立した番号を付し、簡易遣り方測量、レベリング、写真撮影後、出土順に番号を付し、1点ごとに遺物カードと遺物台帳に記録し、層位ごとに取り上げた。

遺構外の遺物は、一括土器、石器等の主要遺物については、遺構に準じて取り上げ、その他の遺物に関しては、基本層序に基づき各トレンチごとに取り上げた。

2. 調査の経過(第2図)

発掘調査の準備のため、3日間を要し、5月16日(金)からAグリットの粗掘り作業に入った。盛土はかたくしまっており、その中に陶器及び古銭が含まれており、調査時に於いても、その後に於いても、とうとう何処から運び、何の目的で盛土をしたのか、わからずじまいだった。これは調査に重大な影響を与えると共に、今後の年代決定時に於いても、資料価値が薄れ



第2図 地形及びグリッド配置図

てしまった。盛土を廃除してから遺構確認までは、Bグリット、Cグリットを設定し調査範囲を拡大し、調査予定面積 280 m²を設定するのに約1ヶ月間を要した。6月24日になって、溝状遺構がBグリットB6区で確認し、Aグリットにも延長していることを確認した。溝状遺構を追跡中に第1号土坑、第2号土坑が確認され、調査も軌道に乗った。7月に入り、順次、第1号竪穴遺構、第2号、第3号とBグリット、Cグリットから発見され、それぞれの遺構の調査が完了したのは7月の中旬である。各セクションの実測及び、写真撮影が完了したのは7月17日であった。発掘区域全体の写真をとり調査は完了した。

3. 基本層序（第3図）

各グリットの中で南北に長く設定したBグリットで観察をした。

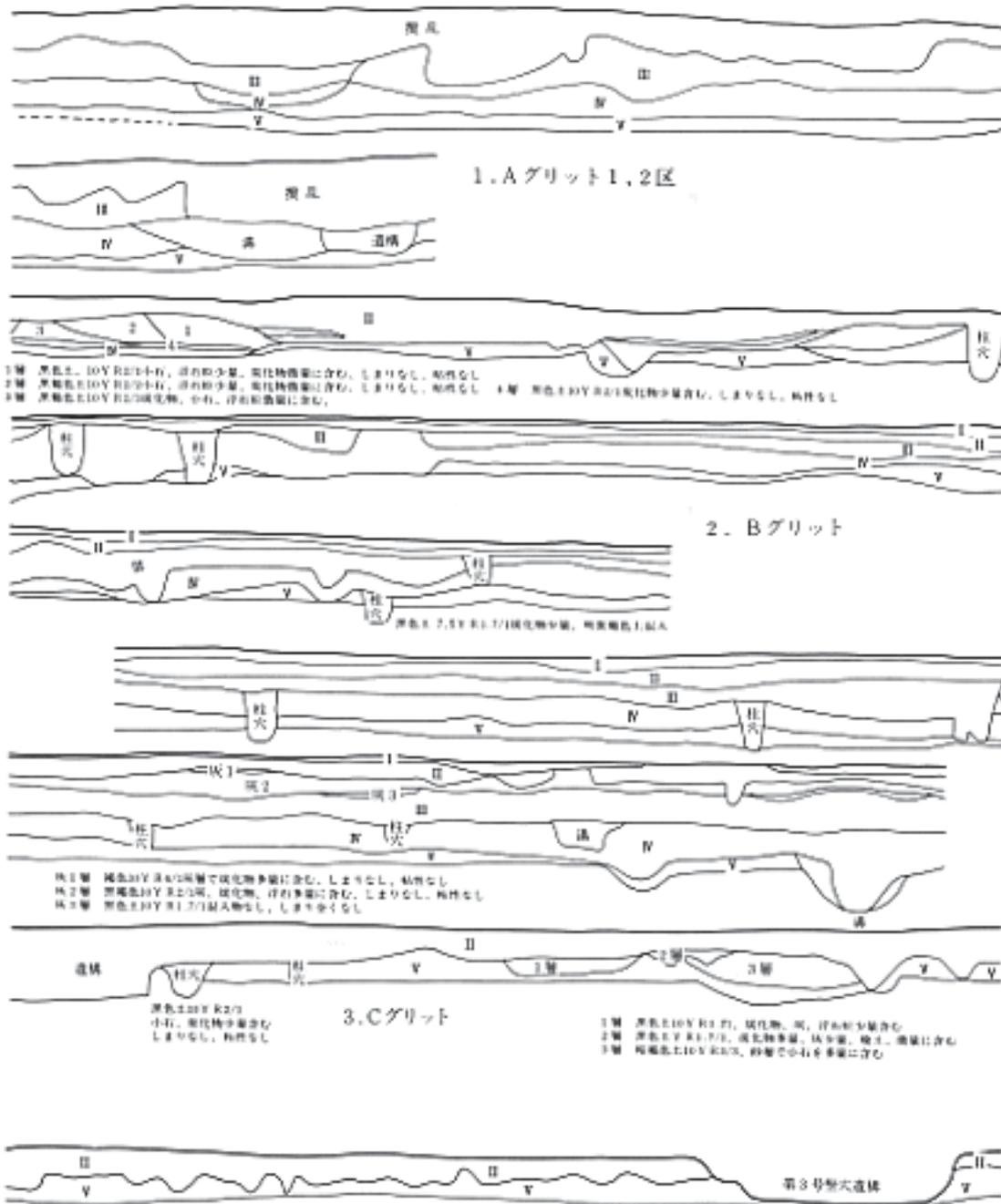
第1層 黒褐色土層(10YR²/₃) 草根が多く、小石を多量に含む。炭化物微量混入し、しまり及び粘性なし。

第2層 黒褐色土層(10YR²/₂) 小石多量浮石粒少量、炭化物微量に混入、しまりわずかに有り、粘性なし。

第3層 黒色土(10YR¹/₂) 小石少量、浮石粒(1mm～5mm)大量に混入、炭化物少量含む、しまり少量(層と同じ)粘性なし。

第4層 暗褐色土(10YR³/₃) 浮石粘少量混入、小石微量、黒色土、明黄褐色土混入、若干のしまり、粘性なし。

第5層 明黄褐色土(10YR⁶/₈) 砂層で小石混入。しまり有り、粘性なし。



第3図 基本層序

検出遺構

1. 竪穴遺構

(1) 第1号遺構(第4図、PL4)Cグリット2区検出 長軸280cm、短軸190cm、西に60cm×70cmの張り出し部を呈し、探さ、最深部で30cmの小竪穴である。床面各隅と長軸中央隅の六柱が主柱と考えられ、覆土は、黒褐色を呈し、砂利、炭化物が少量含む単一層であり、床面から覆土にかけて、遺物の出土はみられなかった。

(2) 第2号竪穴遺構(第5図、PL4)Bグリット4区で検出、長軸310cm、短軸155cm、北に50cm×50cm略方形の張り出し部を呈し、深さ40cmの小竪穴である。小竪穴のわりに四隅は勿論、壁面に10個処の柱穴が検出され、張り出し部にも、またその外側にも3個処がみられ、本遺構に伴う柱穴と考えられるが配置は明確でない。覆土からの出土遺物に青磁無文碗が一点あるが、床面からの出土品はない。

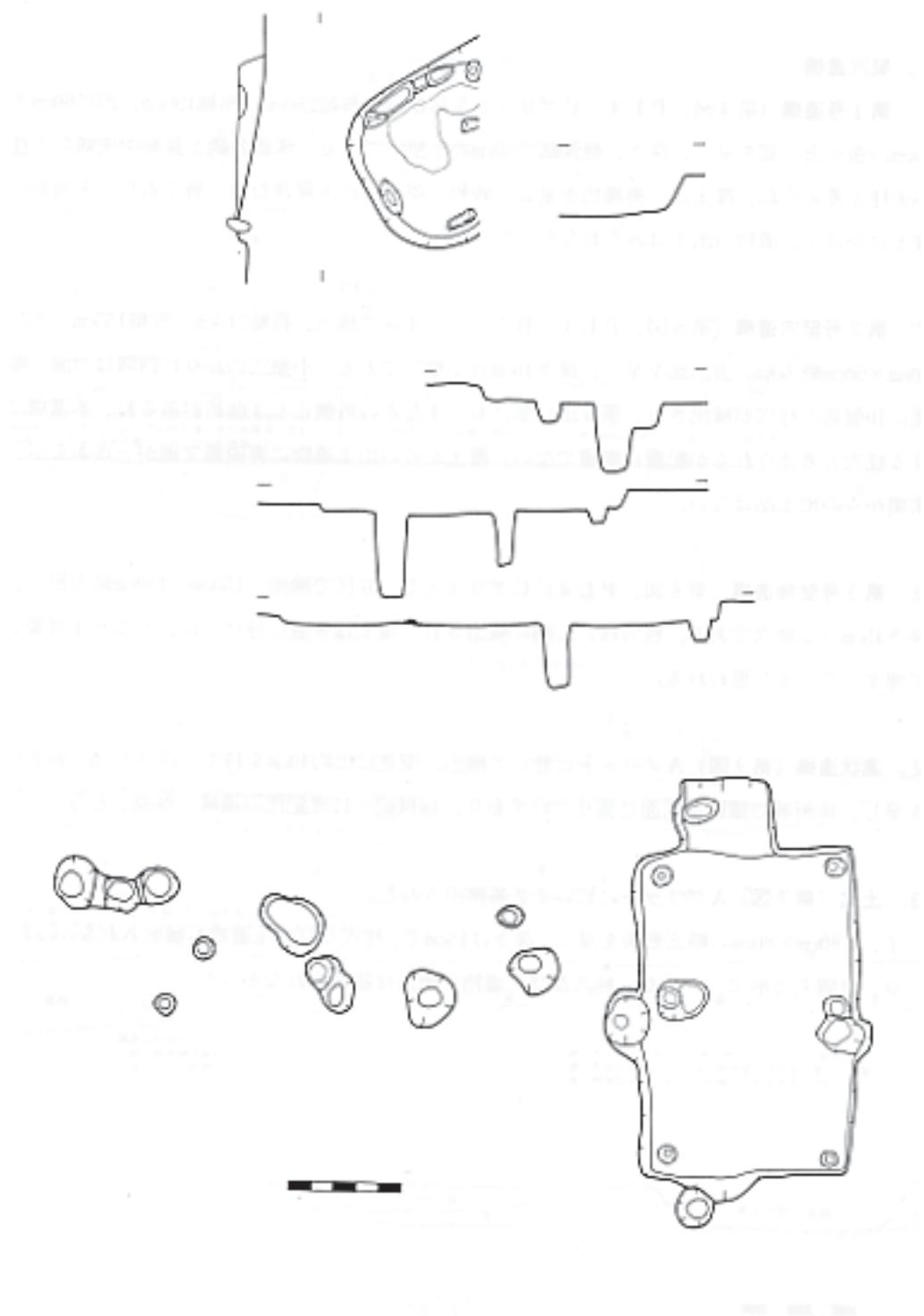
(3) 第3号堅物遺構(第6図、PL4)Cグリット5、6区で検出、150cm×150cm略方形で、深さ45cmの小竪穴である。柱穴は、三隅に検出され、覆土は5層に分けられ、かなり年月要して埋まっていると思われる。

2. 溝状遺構(第7図)Aグリットに於いて検出、南北に巾約40cmを持ち、深さ20cmで鍋底状を呈し、珠州系の播鉢が床面に張りついており、16世紀～17世紀代の遺構と推測される。

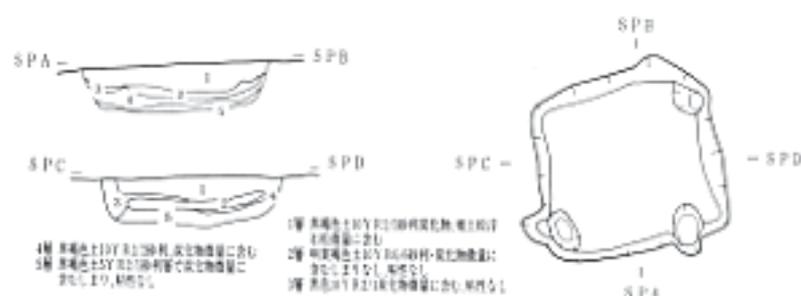
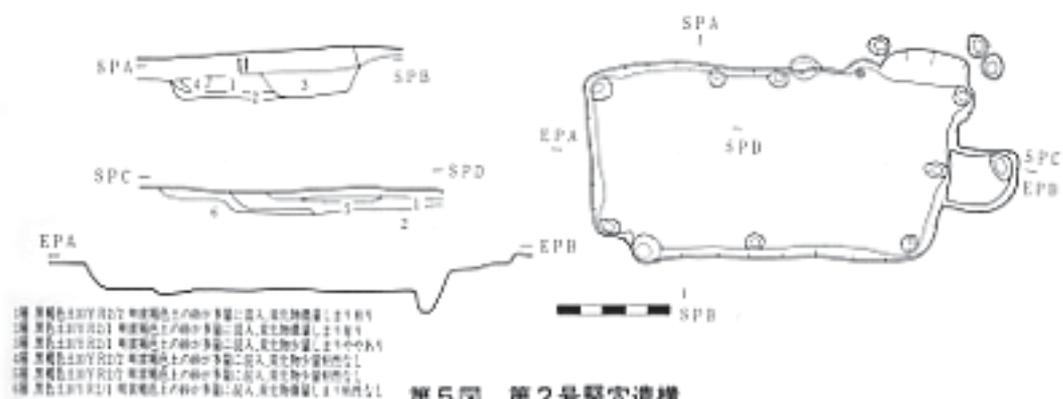
3. 土坑(第7図)Aグリットに於いて2基検出された。

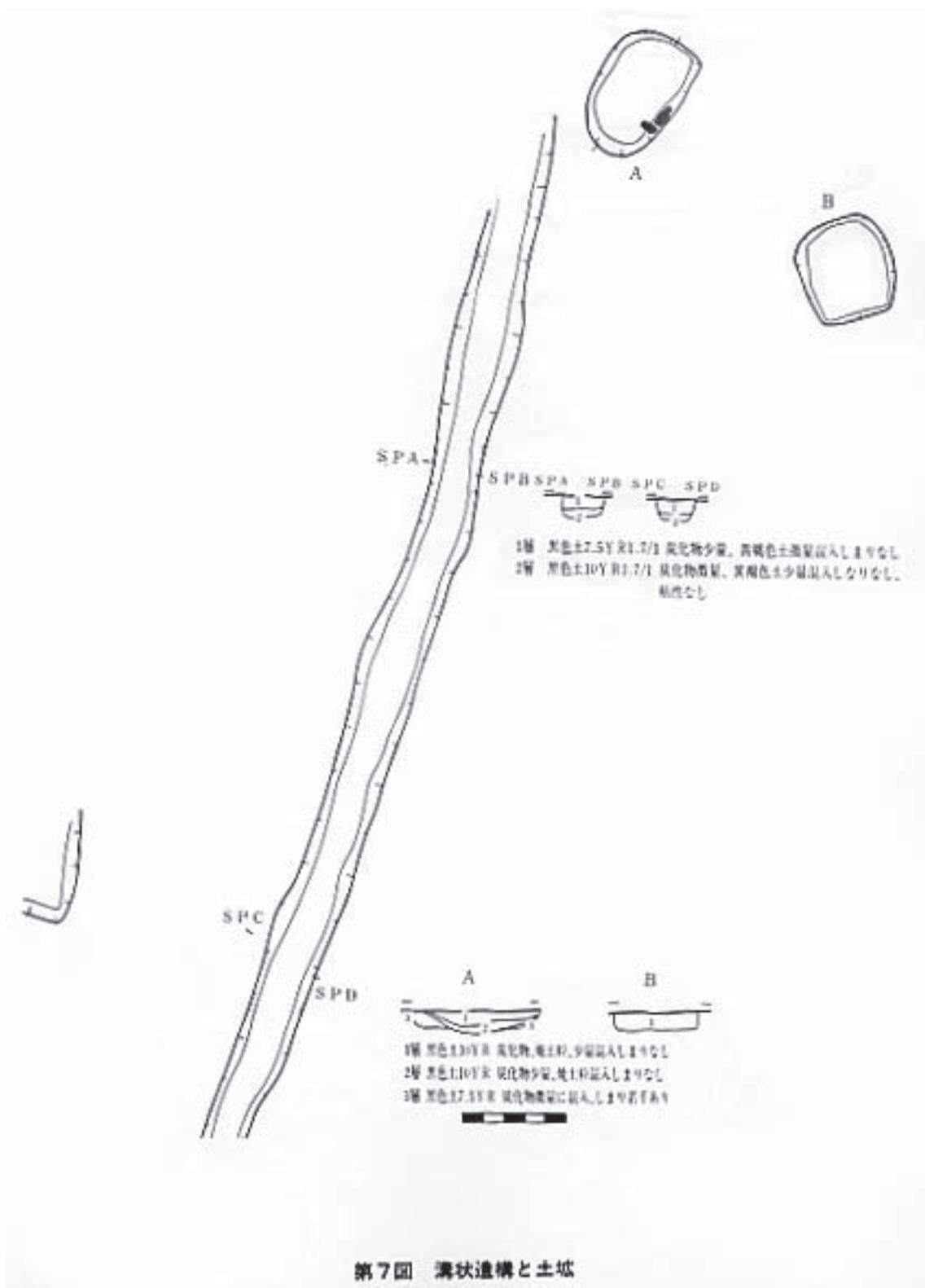
イ、は80cm×80cmの略正形系を呈し、深さは15cmで、柱穴及び出土遺物も検出されなかった。

ロ、は隅丸方形で、やはり、柱穴及び、遺物の検出は認められなかった。



第4图 1号竖穴跡





出土遺物

1. 土 器

土器は、整地された盛り土より、縄文土器、円筒上層式及び土師器、須恵器及び無銘銭、陶器が出土したが、場所及び目的が定かでないため、それを確認した時点で報告したいと思っている。

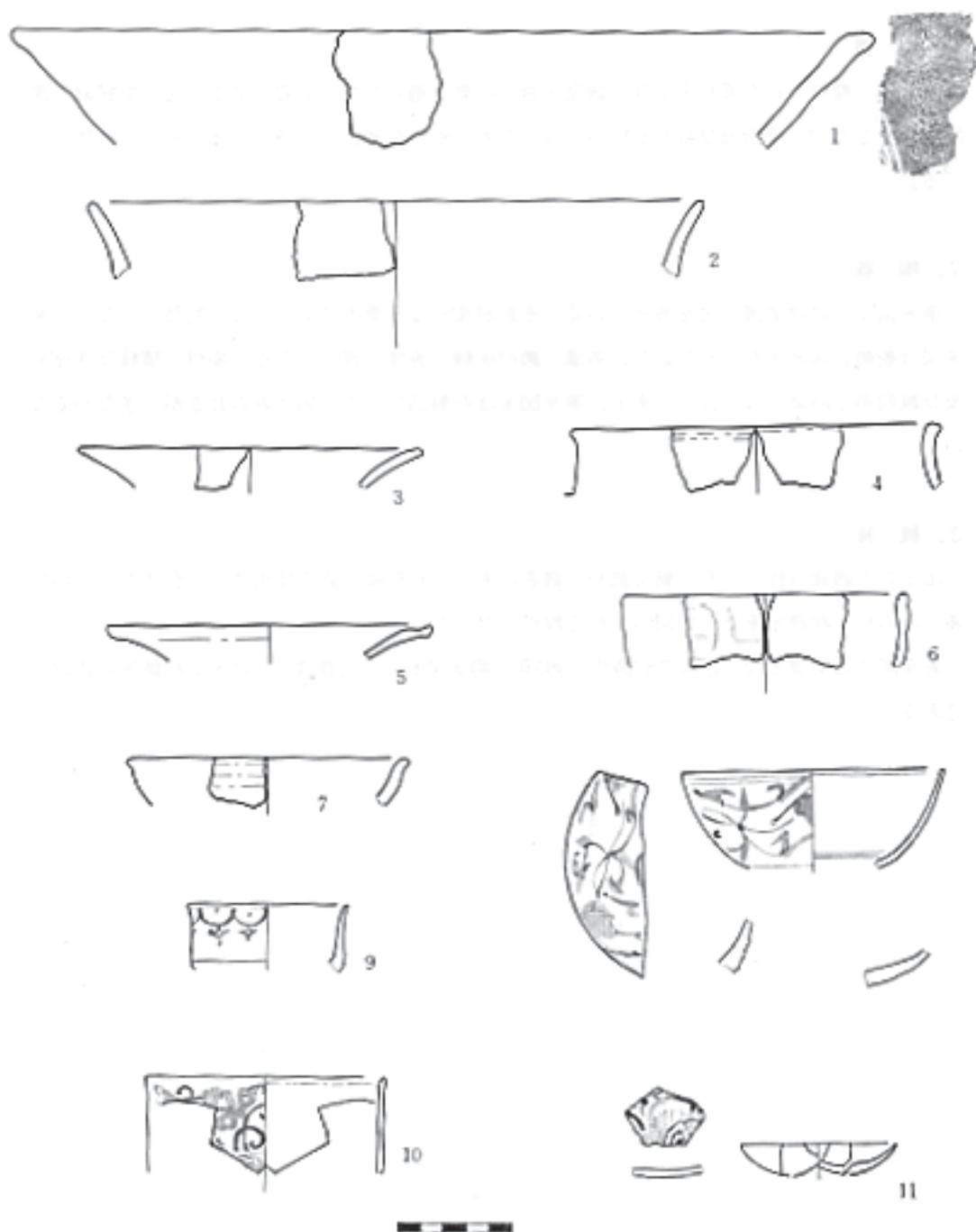
2. 陶 器

第8図1だけは美濃で火を被っていて、それが如何なる要因によるものか判然としない。第8図は舶載、国産入り乱れており、美濃、瀬戸灰釉、唐津、青磁、白磁、染付、釉鉢は珠州系及び越前系と時期もばらばらである。第9図8は石製品で臼の一部とみられるが、さだかでない。

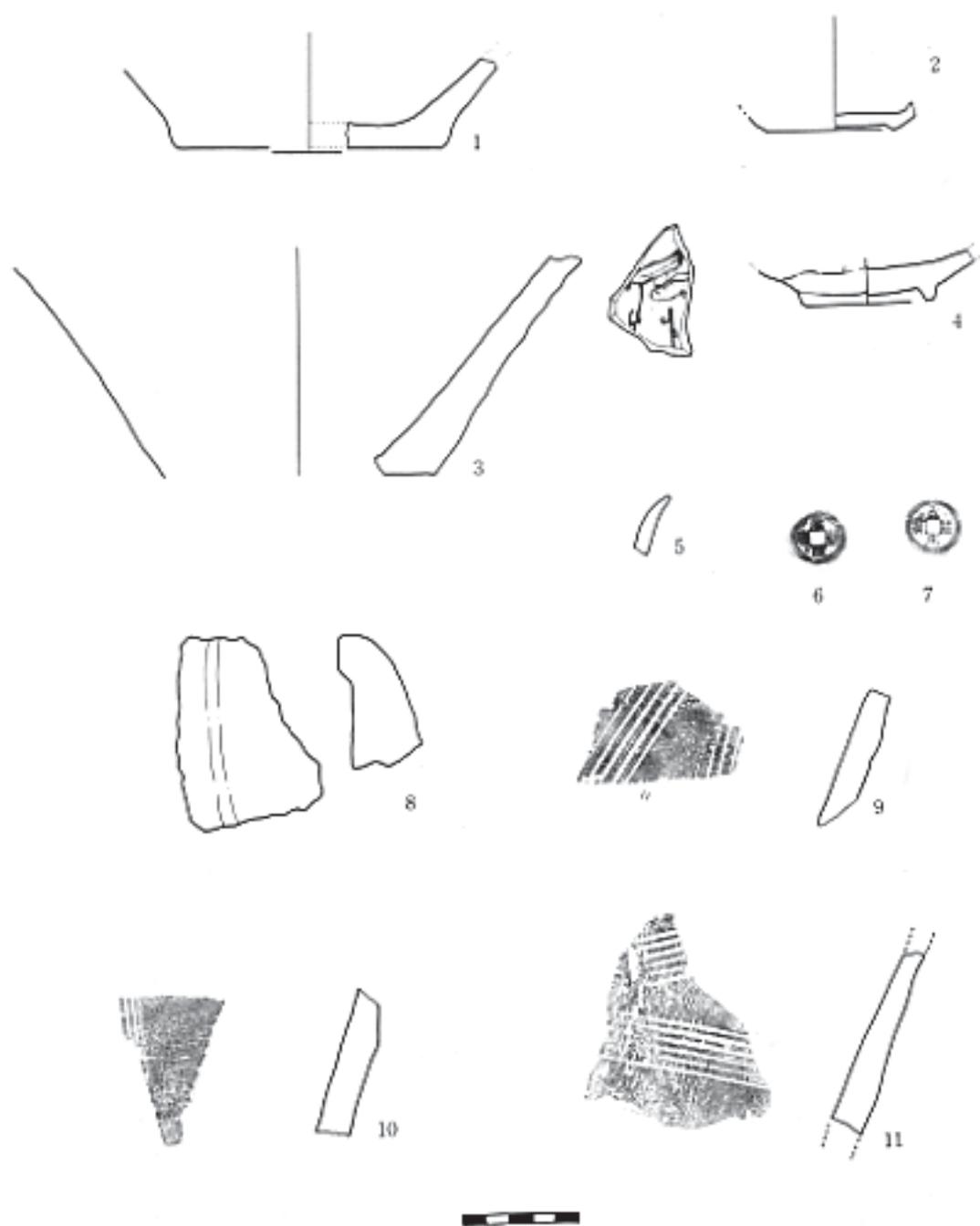
3. 銭 貨

出土した銭貨11枚のうち、無文銭や、銭名はあっても粗雑な鑄造技術による私鑄的なものが多くみられ、判読出来たのは図示した2枚だけだった。

第9図7は至道元宝、北宋で初鑄年は995年、第9図6は、元豊通宝、北宋で初鑄年は1078年である。



第8圖 出土遺物



第9図 出土遺物

PL1



横内城跡全景（昭和57年 概東北測量）

PL2



発掘区域全景



Bグリット南端部



C、Aグリット中央部



Aグリット北端部



Aグリット遺構確認拡張部



発掘状況

PL3



Bグリット基本層序 (5区)



Bグリット基本層序 (6区)



基本層序 (1, 2区)



基本層序 (3, 4区)



Cグリット連続確認面



Aグリット流状連続及び土堆

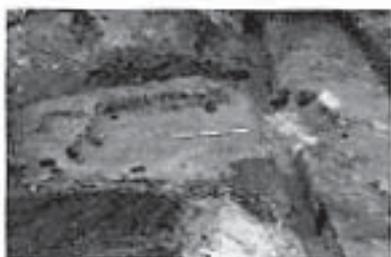
PL4



青磁出土状況



白磁出土状況



第1号竪穴遺構



第2号竪穴遺構



第3号竪穴遺構



土壇

PL5



1



2



3



4



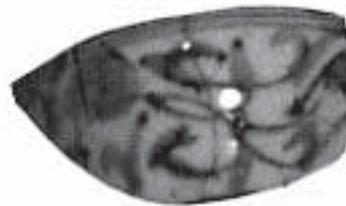
5



6



7



8



9



10



11

出土遺物 (1)

PL6



出土遺物 (2)

まとめ

1. 遺構

本調査区より検出された遺構は、竪穴遺構3、溝状遺構1基、土坑2基の計6基である。

竪穴遺構については、形態は長方形をし、張り出し部を有している。これを出入口とみるかどうかも問題である。また、覆土の状態は、一時埋没を呈し、かまど、炉跡は3基とも認められず、床面からの焼土も検出されなかった。県内においても城館跡に類例が多く、浪岡城、根城、尻八館等に検出例はあり、住居跡説、倉庫説、作業場説、厩説、集会所説等があるが、横内城跡の - 部の地域のこれだけの資料だけでは結論づける何ものもない状況なので、今後の調査による遺物の残存状況に期待される。

溝状遺構についても珠洲系挿鉢が床面に附著していたことで中世の後半に属し、本溝と竪穴遺構との関係も明らかでなく、今のところ規則性がなく、不明というよりいたしかたない。土坑は溝状遺構と同時期と思われるが、これも用途については明らかにし得ない。

2. 遺物

盛り土の中からの遺物が多く、遺構に附属しているものが少なく、空堀りの土をもって整地をしたものか、土居を後世になってきりくずして整地したのか定かでないが、銭貨陶磁器共に巾があり、城館の築城から廃棄年代まで、時期的変遷をたどることが出来ずじまいである。今後は、遺構内出土遺物を足がかりとしてセット関係を把握する必要があると思われる。

(編集・執筆 塩谷隆正)

横内城発掘調査報告書

発行日：昭和2年3月31日

発行者：青森市教育委員会

印刷所：青森オフセット印刷株式会社